

長崎県地方史だより

第74号

題字 小曾根 星 堂 先生

寛文の大火と踊町の再編成

原田博二



一、寛文の大火と
大町の分割

寛文三年（一六六三）三月八日の
昼頃、筑後町から

発生した火災は、折からの強風にあおられ、瞬く間に長崎の全域に燃え広がり、当時の長崎の町六十六町の内、出島町、今町、金屋町の三町を除く六十三町が罹災、内、五十七町は全焼という、壊滅的な被害であった。

驚いた幕府は、長崎の町に多額の資金を下賜、長崎の町の復興に取り掛かった。さらに、その復興策なかで通り筋、すなわち表通りは四間、横町は三間、さらには一尺五寸の溝をつけるなど、火災にも考慮するなど大改造がなされた。

さらに、寛文十二年（一六七二）築町は東築町と西築町に、下町は本下町と今下町に、後興善町は後興善町と新興善町に、恵美須町は恵美須町と大黒町に、上町は西上町と東上町に、筑後町は下筑後町と上筑後町に、馬町は北馬町と南馬町に、今紺屋町は今紺屋町と中紺屋町に、濱町は西濱町と東濱町に、新大工町は新

大工町と出来大工町に、今石灰町は今石灰町と新石灰町に、今鍛冶屋町は今鍛冶屋町と出来鍛冶屋町というように、大町が二つの町に分割されたが、さらに、古川町はもつと大きい町ということで、西古川町と東古川町と本古川町の三つの町に分割された。

これら大町の分割によって、西築町、今下町、新興善町、大黒町、東上町、上筑後町、南馬町、中紺屋町、東濱町、出来大工町、新石灰町、出来鍛冶屋町、東古川町、本古川町の十四町が誕生、長崎の町は全部で八十町となった。

『寛宝日記』（写本一冊 長崎歴史文化博物館収蔵）の「長崎火事焼失之町数間数并家数内（外）町分」によると、出嶋町を除くそれぞれの町の家数は（表Ⅰ）のとおりである。

以上のように、最多は古川町の百五十四軒、最少は江戸町の十六軒。ちなみに大町として分割された十四町のそれぞれの家数は、傍線をほどこした町で、最少は後興善町の三十六軒、その次は下町の四十一軒などであった。

しかし、分割されなかった町の軒

目次

・ 寛文の大火と踊町の再編成	原田 博二	1
・ 長崎砂糖考	村崎 春樹	4
・ 地方史研究会及び県内各加入団体の活動状況		7
・ 事務局より		10